

教育と産業

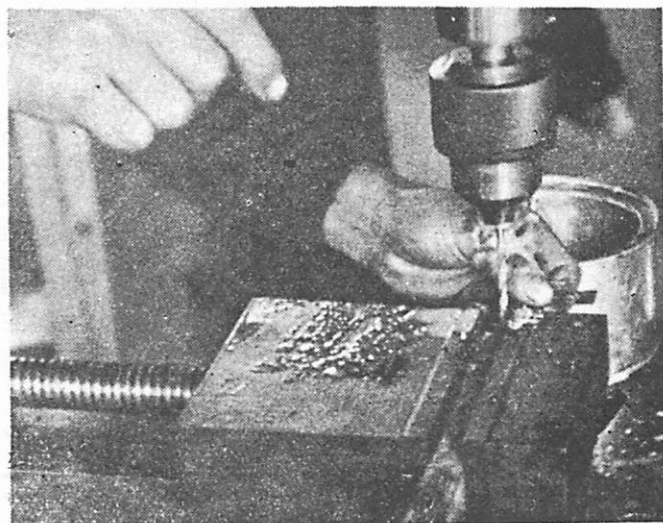
産業教育研究連盟

第六卷 第一号

特集——科学技術教育振興策の問題点——

- 中学校における進学コースと就職コースの設置について……清原道寿… 1
……後藤豊治
- 教研集会をかえりみて……山口富造… 11
……村田泰彦
- 教研集会にのぞんで……21
- 地域の生産学習にひかりを……重松敬一… 28
- 教師と国際労働者階級運動……(書評)… 31

1月



(ボール盤)

正月はこわい

新年おめでとつございます

私はもともとすなおで、それだけ月なみな人間だから正月がくればやっぱりひと様同様めでたいと思う。大したアテもなしに、今年はしっかりやろう、などと顔面筋肉をひっぱらせてみて、そのくせ松もとれない中にもとのモクアミにかえってしまふあたりも、しごくたあいなくて、だからほんとにオメデタイんだと、自分からサジを投げたかっこうである。

しかし、今年の正月はどうもちがう。何となく気持の居場所が定まらないようで、しっかりやろうにも何にももっとどえらいものにえり首をとつかまえられて、一も二もなく引きずっていかれそうなんばいである。

昔の人はのんびりしていたから、一年の計は……なんて気取っていられたが、末の世に生きるせわしなさは、一年どころか一月の計さえ、おぼつかない。歴史における主体性のソウ失だ、と叱られたら、借問する、そんなことをいったって、去年の正月、誰がこの年の中にわれわれの頭の上を人工衛星なんてものがとびかい、おまけに、兎は月で餅をつくとかばかりおぼえてたら、その衛星とやらの中にも、ライカ犬が静かに眠っているというようなたまげたシカケになろうと思いましたが。

この調子でいったひには、今年もどうぞよろしくなんて気安だてに口にはしているその今年サマから、何がとび出し、何をぶつつけられるかわかったものではない。そう思うと、落語のまんじゅうこわいよりはよっぽど真に

せまって、私には正月がこわい。

こんにちの科学、産業、経済、政治、およそ風俗の生活をはびばつてくれる百般の、そのまた一々の機構をうかがい知るなどは、たとい一〇人のプラトン、百人のレオナルド・ダ・ヴィンチをもつてしてもかなうことではない。(想えばいにしえなんて甘いモンでしたナ)しかもそれらがからまりあつておりなす社会の運動法則——とまではいなくても、大よその方向を、アクセクかせいでいる御同様ハツクマサンクマサンみんなが、胸にストンとたしかめあつて、おのがじし自分の責任において才覚を働かせていこうというのには、浮世離れた坊さんの寝ごとでなしに、ものごとの本質をさぐり、基盤をたしかめる仕事はナマの生活のために必要になつてくる。かつて二九年のパニックにガク然としたアメリカが、血なまこになつてインテグレーション(統合)の原理をもとめた切なさ——そしてそれは、モザイックな綜合とフアナティックな民主主義の神話にすりかえられてしまつたが——いく百倍もの重みをかけて、われわれの頭にかかつてきているのだと思う。

かりに本質的な理解とは何か、基礎的な技術とは何かを問うにしても、そういう大変な歴史をのぞくんだぞという気がまえないと、サイの河原の石つみよりもっとバカげた仕事にしかならない気がする。そうなるもまた今年、どえらくしつかりしなければならぬことになつてしまふ。

だから、正月はこわい。

中学校における

進学コースと就職コースの設置について

去る十一月十一日、中央教育審議会は「科学技術教育の振興策」を答申し、小学校から大学、および社会教育における科学技術教育について、いくつかの「振興策」をしめた。これらの「振興策」と関連し、あるいは、それにもとづいて、中央産業教育審議会、教育課程審議会などの各種の審議会が、「科学技術教育の振興策」を提示してきている。われわれがこれらの動きを検討するとき、これからの日本の科学技術教育の振興にとって、かならずやよくない結果をひきおこすだろうような問題点が、いくつか見いだされる。これらの問題点について、今後数回にわたって、批判検討を加えていきたい。

本誌においては、中教審の答申のなかで、中学校の「高学年においては、いっそう進路特性に応ずる教育を行うことができるように教育課程を改善すること」という意見をうけて、教課審が、中学校の上学年で選択科目を多くし、「就職コース」と「進学コース」とにわけ「就職コース」は職業準備の教育を「進学コース」は進学準備の教育を強化しようとしていることについて、技術教育の立場と職業指導の立場から批判をこころみることとした。

(編集部)

科学技術教育振興策

1 技術教育の立場から

第二次大戦後の科学技術の飛躍的な発展は、めざましいものがあり、それは一八世紀後半からの産業革命、および一九世紀後半から二〇世紀にかけての電気・重化学工業を中心とする技術の革新をしのごものがあるといわれている。戦後にはじまるこの新しい時代をはじめには原子力時代とよび、ついでオートメーション時代といひ人工衛星がまのあたりにとんでいる現段階においては、宇宙時代がはじまったといわれ、「新しい世界観の創造」(中央公論 一九五七年二月号)が日程にのぼっている。

すでに欧米諸国では、ここ数年來、このような新しい時代に対応するには、新しい時代にふさわしい人間をつくるための教育に重点をおかなければならぬことを痛感し、科学技術教育のありかたをめぐって、教育全般を再編成する動きが日程にのぼっている。

ソヴェトでは、革命以來、総合技術教育が教育全般をつらぬくすじがねとなってきたが、第二次大戦を終ると同時に、その再検討をはじめ、義務教育一〇カ年の教科課程を総合技術教育の観点から再編成し、各教科は総合技術教育をすじがねとしてどのような内容をもどのように指導すべきに努力し、一時廃止していた技術教科も復活された。

こうした総合技術教育をすじがねとした基礎教育のうえに、青年労働者のための職業技術学校、または大学の専門教育がすみあげら

れている。しかも、学生の多数をしめる専門技術教育の大学においても、一般教養が重視され、たとえば工科関係の大学の試験に、「トルストイの戦争と平和におけるナターシャの魅力について」三時間の論文をかかせるといわれるように、豊かな人間性をそなえた科学技術者の養成につとめている。このことは、これまでの他の国々の専門的科学技术教育が、一般的に、社会人でありながら「研究室内だけの個人的な科学的研究に自己満足し、じぶん住む社会のことからは、あまり科学的な目をむけないような科学技術者を養成しているのと対照的である。

このようなソヴェト教育のありかたは、すでに古くはマルクス、エンゲルスによって提示され、革命直後のソヴェト国家が、学校教育の目的を「人間の知育・道徳教育・美育および体育とその総合技術教育を結びつけることによって実現される人間の人格の全面的発達」にありとして努力してきたことが、ここに実をむすぶにいたったといえる。しかも、「人間の人格の全面的発達」をめざす一〇カ年の総合技術教育をうけ、一方では、その上に専門的科学技术の教養とともに一般教養をかねそなえた大量の大学卒業生、他方では就労後も各種の職業技術学校に学ぶ青年労働者層の厚さ、こうした国民各階層の協力が、ソヴェトの科学技術の飛躍的発達の重要なモメントの一つとなっているといえる。

二

ソヴェトの科学技術の発展の原因が、その教育体制に大きく依存することを、各国とも一九五五年ごろから気づきはじめた。水爆におくれをとったアメリカでは、アイゼンハワー大統領が談話を発表し、理工科大学卒業生の数がソヴェトの養成計画におよばないこ

とをうれえ、理工科系大学進学者の増加の必要性を強調した。その後、理工科系大学卒業者の給料の増加などの方策により、数的には学生数が増加の傾向をみせた。しかし数的な増加のみでは、ソヴェトと太刀うちできないことが、人工衛星の出現を契機として、深く反省されるにいたった。質を高めなければならぬ。それにはアメリカの学校教育全体を再検討すべきことが、緊急の課題として強調されるにいたった。このことについて、朝日新聞(三二・一一・一三)は、アメリカの世論をつぎのように報じている。

スプートニク第二号が打上げられた直後、シカゴ大学経済学部長セオドア・シュルツ教授は「米国の高校では優れた学生が、クラスで非常にとげとげしいインテリ軽視の風潮にさらされていく」と、インテリぎらいな米国気質の根本に触れる報告を発表した。米教育界の現状をもっとも激しく批判した声としては、ワシントン地区の学校の科学教育長ケース・ジョンソン氏の次のような演説が報道界に大きく紹介されている。

アナコスタア高校(ワシントン地区の高校でフットボール選手権保持校は)モスクワのスプートニク高校にフットボールでは簡単に勝つだろう。しかしソ連の高校生は、米国の高校生より短い教育計画で米国最高といわれるマサチューセッツ工科大学の入学資格の五倍の教育をうけている。ソ連の生徒は物理学を五年やらされるが、米国にはそれが全然ない。数学ではソ連が六年、米国は一年、生物学ではソ連が三年、米国では選択科目になっている。米教育界からこれほど率直にソ連をはめた言葉がでたのは非常にめづらしい。……

こうしたアメリカの科学技術教育のたちおくれにたいし、アイゼ

ンハワーは十一月七日夜、全米向けのラジオ・テレビ放送で、教育の重視すべきことを演説したが、アイクにそのことを進言した一人といわれるハイネク博士(天体物理学者)は、「われわれも教育組織を幼稚園までさかのぼって改革する必要がある。子どもたちに科学心を植えつけるためには、幼稚園で話してきかせるおとぎ話にも気をつけなければなるまい」とのべ、高等学校教育はもろんのと、初等教育の段階から、新しい事態に応じて教育を再検討する必要性を強調している。

しかし、これまでのアメリカの教育全般が、科学技術教育をおこなっていなかったわけではない。日本の教育の実情にくらぶれば、とくに技術教育の分野ではすぐれたものをもっている。すでに、一般教育としての技術教育は、インダストリアル・アーツの名のもとに、一九一〇年代からはじまっていて、小学校から高等学校の普通課程にまでおよんでいる。しかし、インダストリアル・アーツも、設置当初の産業技術的色彩が、一九二九年の大恐慌後から消費生活技術的色彩とトライアウト的色彩とを濃厚にしてきている。しかし、その教育内容はアメリカの国民生活の科学技術的水準の高さを反映して、かなり高いものをとりあげている。しかし、生産技術の基本に基盤をおくソヴェトの中学校の技術教科の内容にくらべてかなり程度の低いものとなっている。

イギリスでも、国民的基盤をもった科学技術層の薄さを痛感し、ソヴェトの教育のありかたに刺戟されて、一九五六年二月に「技術教育白書」をだした。これについては、これまでしばしば紹介されている(註)ので、ここにはふれないが、その根本的な立場は、新しい時代に応ずる技術教育の方針として「技術教育は特定職業へむか

ってあまり狭くなつてはいけない、職業の一技に固まらせてはいけない。」とし、これからの技術教育は、青年男女をして将来の生産技術へ広く十分に適応できるような能力をえさせるために、学校ではその基礎教育を重視し、数学・科学に重点をおくべきことを強調している。これによって国民的基盤をもった科学技術層の薄さの欠陥を克服し、さらに専門技術教育においても、狭い特定の専門技術教育に終始するのではなく、広い教養を重視すべきこととしている。

このように、それぞれの社会体制のちがいはありながら、各国とも科学技術教育のありかたをめぐって、特徴的な一つの傾向があらわれている。その一つは、国民全体の科学技術の水準を高めるために、一般教養としての科学技術教育を強化していること、つぎに大学などの専門技術教育においても、社会人としての広い一般教養の学習を重視していることである。

(注) 桐原葆見 技術教育拡充五カ年計画—イギリスの技術教育
白書—(雑誌 産業教育 昭和三一・一月号) および、日
教組編 当面する科学技術並びに産業教育に関する資料(昭
和三二・七月)

三

それでは、わが国の「科学技術教育の振興策」はどうであるか。欧米諸国に刺戟されて、中教審をはじめとして、いくつかの「振興策」の案がだされている。それらの方策には、日本の教育の現状の欠点を指摘するすぐれた点もみとめられるが、いくつかの重要な問題点をはらんでいる。ここでは、これらの問題点のうち、中学校の「高学年において、進路特性に応ずる教育」をおこなうという名目のもとに、選択制を拡げて、進学者と非進学者のコースを分化し、

進学者には「基礎学力の向上」を、非進学者には「職業技術教育」といった構想について技術教育の観点から問題点を指摘しよう。

すでにのべたように、国民的基盤をもった科学技術層の厚さなしには、国の科学技術水準の高まりは期待できないところから、ソヴェトでもアメリカでも、一般教養としての科学教育・技術教育を重視し、初等国民教育の段階から、これをとりあげてきている。わが国では、科学教育は、男女をとわず普通教育として位置づけられていたにかかわらず、技術教育は「実業教育」「職業教育」の名のもとに、学校卒業後すぐ就職するものにおこなう準備教育であるといった考え方が、社会一般に根づくようになって、技術教育を一般教養として普通教育に位置づけることは無視されてきた。ただ、戦後の中学校には、「職業科」が新しくおかれたが、本誌上でもしばしばのべられたように、戦前の「実業科教育」「作業科教育」や「職業指導」などが混在し、およそ一般技術教育として明確さを欠いていた。これがこのたびの教科課程の改訂によって、アメリカのインダストリアル・アーツに範をとり、「技術科」として工業的分野に重点をおいて改編されようとしていることは、共通必修の職業科教育として、教育内容の面からいえば、これまでよりも一応の前進であるといえよう。

しかし、こうした反面、選択制をひろげることによって、実質的には進学組と就職組のコースをはっきりと分化させ、一方では非進学者にすぐに役にたつ目さきの職業準備教育を強化しようとしている。こうした教育は、第一に生徒に狭い特定の職業訓練を与え、現在の職業の特定の技能に固まらせることになる。これは、現代の技術革新により、職種の変転のめまぐるしい時代に応じえない「職業

準備教育」といえる。しかも、これまでに一部の中学校でおこなわれている「就職組」の「職業準備教育」が、どのようなものであるかの一例を、つぎの新聞記事は語っている。

去る十月の中ごろ、江戸川区のM中学校に、東京都内の先生が集まって「進路指導の研究会」を行ったときのこと、同校はクラスを進路別に分けているので、前から職業指導の先生たちの注目の的だったが……参観させられた授業は全部進学組で、就職組の子供たちは、お客の先生にお茶を出したり、使い走りをさせられたりしていた。そこである先生がお茶くみの子を物蔭に呼んで聞いてみると「ぼくたちはふつうの勉強をするよりも、この方がためになると思います」という答だったが、何か割り切れないものを先生はその子の表情から受けとったという（東京新聞 三二・一二・九）

こうした実情はこの学校ばかりでない。普通教科の学習を放棄して、あるいは、お茶くみや応待、そろばんの技能の習熟に学習時間をつかうことをもって「役にたつ教育」としたり、木工機械の設備でもあると、木工の「仕事のやりかた」の訓練だけに終始して、木工技能の習熟と盲目的に働く「勤労主義」教育となっている。

すでに前にのべたように、今日の産業技術の急速な進歩に国民教育が応じうるためには、たえず進展している生産技術に適應できるような幅広い基礎的学力を、子どもたちに学習させなければならぬ。そうしたときにあたって、「役にたつ教育」とか「進路特性におうずる教育」といった、いかにも子どもたちの幸福を考えているかのような言辞をつかって、以上のべたような就職組の職業準備教育を強化することは、現代の技術革新におうじた科学技術教育のありか

たを真剣に考えていないものであり、したがって、また、次代になう子どもたちの将来の成長と幸福を無視した教育を意図しているといえよう。

さらに、進学者のコースにたいしては「基礎学力の向上」の名のもとに、進学準備の知識の教育が強化されようとしている。そこでは、あいかわらず、将来の指導者（支配者）の教育は、「頭・心」の教育に重点があるとの考え方が支配的である。そして、技術的の教育は就職組の生徒がやることであるとの考え方が払拭されず、したがって一般教養としての技術教育は、進学組では軽視されがちになり、共通としてわずかの時間配当される「技術科教育もないがしろにされることになろう。このような進学準備教育をうけた子どもたちが、上級学校へすすんでいっても、質の高い科学技術者を大量に社会におくりだすことはできないだろう。このことは、一般技術教育の伝統をもたない、これまでの日本の教育をうけた指導者層（支配者層）が、当面する科学技術の振興に、正しくとりくみえず、欧米諸国にたちおくれしていることから明らかといえよう。

われわれは、本誌上でも、また他の機会においても、しばしば主張してきたように、これまでの中学校教育で陥没している一般技術教育を、国民教育として正しく位置づけること、ここにこそ目をむけるべきであり、就職組、進学組のコースわけは、今日の科学技術教育の振興に逆行するものと確言できる。

△清原道寿▽

2 生活指導の立場から

——「進路特性に応ずる指導」ということ——

さきに文部省は中央教育審議会に「科学技術教育振興方策について」諮問した。そのなかにいささか気にかかる点があった。それは諮問中の「教育内容について」の(二)の部分である。

(二) 小学校・中学校および高等学校

ア、小学校・中学校および高等学校における数学・理科・技術的教科は、科学技術教育の基礎であり、また産業人・社会人としての科学技術的水準の向上のためにその振興がのぞまれるが、現在の教科・時間数・学習指導法に改善を必要としな
いか。

イ、高等学校へ進学しないものに対し、中学校における職業的
教育・技術教育的教養を高めるべきであるといわれているが
どのように対処すべきか。

当時、われわれはこのアとイの関連をどううけとつたらよいかにとまどった。アのうえにさらにイが問われる必要があるのか。イがことさらに問われるのは、中学校のうちにも、せまい、すぐ役立つ職業的技能や、進学者とちがった態度の習得をこととする就職コース
実用的職業教育をうける一群をつくる期待を含んでいるのだ、とみて
いた。

はたして、十一月十一日の中教審の答申は、

「高校と中学校の卒業者は、進学するものとただちに職業につくものとに分れるので、これら生徒の進路の多様性に応じた指導を行ふべきだ。このため……中学校では高学年で進路特性に応ずるような指導を行う。高等学校ではコース制を強化する。……」
とうち出してきた。

中学校での「進路特性に応ずる指導」は、第三学年で、進学するものと就職するものとにわけ、就職するものには「すぐ役立つような職業教育」と「被備者としての態度・習慣のしつけ」が強化されるだろうことは目に見えている。前者の「すぐ役立つ職業教育」がこれからの有能な産業人育成にとって妥当な構想でないことは前の論文であきらかにされると思うので、ここでは、主として後者についてとり上げよう。

二

わが国の科学技術教育振興には、日本の路線が用意されている。それはまず高級技術者やその補助者としての技手級(中級技術者)の大量造出であつて、そのすそ野をなす国民大衆・労働大衆の技術水準の向上については、故意ともいえるほどにネグレクトされていることだ。したがって高校・大学に進学するものに対する科学教育振興は急務であつても、それ以外のものに要求されるのは、むしろ「忠誠」な働きアリとしての能力であり、態度である。なまじっか民主主義精神を体得されたり、創造的意欲・合理性・協同性などが育てられては、有能積極的な労働者として、手をとり合つて労働条件の改善にまい進されたり、さらには「産業の状態と対決してこれを計画的に統御してゆく」ことになる心配がある。だから、就職するものには、基礎科学の教養はほどほどにして、徒弟教育的な「実

用的職業教育」や「忠誠」「忍耐」「勤勉」などのこまぎれ徳目へのしつけに力をいれる教育がよい。雇用のきびしさというきめ手で、教育をこのような方向へ統御していく自信はある、というにもひとしい。

高級技術者のばあいは背にハテはかえられない。「列国との競争に落伍しない」ためには、科学技術教育の急速な振興をすすめるけれども、やはり企業の安全のためには、イギリスのような、完全雇用をめざしての社会科学の学習などはさておいても、「人格教育・しつけ教育」や「技術者倫理」の徹底をはかる必要がある（註、ということであろう）。

（註）日経連の「新時代の要諦に対応する技術教育に関する意見」とイギリスの「技術教育」白書とを対比してみられよ。拙稿「学習内容の編成とその指導（産業技術教育講座 第三巻）」にも簡単に指摘しておいた。

この時代こそ、国民すべての技術的水準のたかまりと、すべての創意創見を育て、科学的・合理的・協同的態度などが培われなければならないときであるのに、むしろそういう特性の育つことをチェックするような教育体制をつくり出そうとする企業経営者や保守政党の意図は、まことに近視眼的であるといわなければならない。これこそ、ながい眼でみて「列国におくれをとる」施策となつて、「悔を次の世代に遺す」ことになるだろう。

三

たしかに、これまで教育現場では、多分に父兄の要望におされて進学組と就職組とをわけ、就職組の指導はなおざりにして、進学組の入試準備学習に力をいれてきた、という事実がある。この事実は

またしても文部省に、新しい施策は現実のありように法制のすじ道をつけてやったまでだ、との逆手をとらせるおそれがある。ましてそれが「父兄の要望」であるとなれば、なおさらのことである。学校における道徳教育の強化も、教科書検定の強化も、それが父兄の大多数の声であるから、という理由づけが用意されていたのは周知のとおりである。

ところが、教育現場での進学組と就職組との組分けは、いまや反省期に入ってきている。組分けしての指導が、よい結果をもたらさないどころか、あまりにも悲惨な人間関係をつくり出してきたからである。たとえば、

（受験補習は）明らかに進学組対象の教育であるため、進学、非進学の生徒の優越感と劣等感を誘発しないではおかない。とくに非進学組のひがみは、大なり、小なり存在することは事実で、このため学校の教育活動がしっくりといかない。さらに、進学組を受持つ一部教師とそうでない教師との間の関係もうまくいかなかった。……（「補習教育の実態と影響」時事通信 内外教育版 第八八七、八号）

右の表現はむしろひかえめであるようだ。われわれの耳にする限りでも、進学組の生徒間に、協同・協力どころか、暗うつなぬけがけの心理や、友だち同志さえおとしめ合うまでの暗い猜疑が育ってきている。父兄から教師への追しようや贈りものが生み出す生徒間や教師間のそねみや対立なども目に見えてくる。さらにみじめなのは、進学組の生徒と就職組の生徒の対立感情であり、それは校内騒じよう・うらみの放火・教師おう打事件などにまで燃えあがったところがあるときく。就職組の生徒に対する差別待遇からくる屈辱

感や、内にもついている劣等感は、どこかで補償される道をもとめるものであるから、今後もことあるごとに爆発するだろう。三月の卒業式後の学校騒ぎのようについでに、胸がいたむのは、筆者一人ではあるまい。こんなことがはたして教育の場のできごとといえるだろうか。また、だから道徳教育を強化しなければならぬのだ、とだけいっておられるだろうか。このような青少年の不幸は、道徳教育強化を強調する教育政策と同じソースから出てきた政策・施策が生み出すものだからだ。

四

国民教育の当面のねらいは、きびしい現実批判にたつて、国民的課題の解決にたちむかう国民のえい知と協同・連帯感を育てあげることにあつて考へる。どの学校、どの学級の生徒も、あまさずこの協同の環の中にくみ入れることが教育の重大関心事でなければならぬ。

このような協同・連帯の意識にみちた集団の成熟は、「集団所属メンバーが集団の行動目標を共同のものとして自覚することのつよさと、その目標達成における民主的協力関係によって促進される。逆に集団メンバーに、所属集団のもつ目標が共同のものとして自覚されず、その目標達成における非民主的・非協力的関係があるばあい阻害される。」と考へる。(引用は筆者の「グループ指導の実験的研究」の基本仮説である。「グループダイナミックス研究」第二輯理想社 参照)これは、学校におけるホームルーム活動やクラブ活動を方向づける基本原理だと思ふ。同好―同志感―共通課題―自発―自主―共同思考―協同解決という展開こそが、グループとしての成熟をもたらし、やがて学校全体の生徒の協同・連帯のじん帯をつ

よめる働きをする。

ところが、学校教育全体が、将来展開する生活の中における自らのありかたの問題を意識し、姿勢をただす前に、そうした生活にはいる機会をつかむことに性急になり、大わらはになつてゐる生徒や父兄、とくに父兄の要望に即応して、目の前の対策に狂奔してゐる。「教育というより、むしろ処置」といつた方がよいような仕事を学校がだきかかえており、そのために学校教育全体が教科の学習に至るまで、処置的な性格をつよめてきてゐる。(岩井竜也「就職と進学をめぐる問題」)という事態、つまり、ここでとりあげた新しい施策がつくり出そうとしてゐる事態は、前にのべた働きをチエツクする事態だとみなければならぬ。事実、進学対策は生活指導をちっ息させかかつてゐる。「……さらに特定の教科を受験のために指導することとなり、他の教科を圧迫したり、あるいは生活指導が重要であるにかかわらず、特活の時間に十分身をいれなかつたり圧縮したりするような危険をはらんでゐる……」(愛媛) (前掲「補習教育の実態と影響」)

かつて中国から帰つた子どもたちは、故国の学校に入つての感想として、こういつてゐる。こちらの学校では、「一生けんめい勉強する人もあるけれど、そういう人も自分だけわかればいい、ほかの人なんかどうでもいいというんです。……相互援助なんてないんです。」(内山・斎藤編「中国の子どもと教師」四五ページ)ここに指摘されたような事態は、今日さらにすすんでいよう。将来の指導者層の教育効率をあげるために、学校をこのような非教育的な場にするとは、本末てんどうではないか。

優勝劣敗、他をだしぬく社会の生きかたが、学校における学習態

度を規制し、学業競争からくるぬげかけや対立・葛藤は、わが国ではふつうのことになりかかっている。それが権力による大衆の屈服につながる。心ある教師は、はやくからこのことに気づいていた。その他の教師も、進学準備態勢を強化し、進学組と就職組とをわけ指導してみた経験から、その点に気づきはじめてきた。そして、今年からこのようなやりかたを「断然やめた」学校がでてくる。

そこへ、非教育的な現実を合理化するような、中学における進学コース・就職コースの分離構想がでてきた。中学校はやがて、教師同志も、生徒同志も対立し、葛藤するどろ沼と化すおそれがある。これは、いわば国民としてのじん帯をすたすたにたち切つて、誰かの支配を容易にする大きな分裂政策のはしりであるときえいえる。

五

さて、「進路に応ずる」コースわけをし、そこでどのような指導が構想されているか。いままで知りえた範囲では、職・家科における選択教材のふりあてにあるらしい。つまり、進学組をより発展的な、入試に規制される以上入試準備的な一学習系列につける一方、就職組を、より実用的な職業準備学習―選択という名の―の系列につけるといふことにあるらしい。

ところが、企業関係の人たちと話合つてみると、大企業はもちろん、小企業でさえ、基礎学力のたかさを要求することが多くなつてきており、職業準備教育を要求する声はむしろ少なくなつてきているように見うける。まして、急速な技術革新がすすんでいる今日、なまはんかなせまい職業の一技の習練にかたまらせることは、むしろさげなければならぬといわれている。(この点については前の

論文で論ぜられるだろう。)

この時代の中小企業のなりゆきについては、的確な予測はむずかしいが、つぎのような見解もある。

オートメーションのできない中小企業は、これから大企業の下請系列に入るものも、これと競争してやつてゆくものも、いずれも甚だ特殊な面倒な仕事で試作品か変動のある創造的な工夫のいふ仕事をしなければならぬことになる。そこに必要なものは大企業の専門従業者以上に、経営的な頭脳と技術的な頭脳と、その上に汎用的な技術とを併せもたなければやつていけない。

すると、むしろ教育されることをチェックし、学問はしごとの邪魔になるとさえ極言してはばからなかつた小企業経営者の従業者観はいやや応なしにかわつてこなければならぬまい。科学技術的基礎を高めることについては前の論文にゆづるとしても、創意・創造・工夫したがって自由な精神の姿勢をつくる指導については、ここで見すごすことはできない。

自由な精神をつくる第一着手は、「人間の行動と思考の前提にある感情を埋没のなかからゆりうごかすこと」であろう。そのためには、「あらゆるものを慣習化し、埋没させようとする環境のなかにあつて、なぜか、の問いを発すること」にはじまり、その疑問が集団の疑問に高められる必要がある。つまり生徒ひとりひとりの主体的なかまえをかえる必要があるのだ。

ところが、いますすめられている施策は、むしろそのような指導を手うすにするようなすじ道を用意しようとしている。この辺に科学技術振興のための施策のなかにある矛盾がおおを出している。もともと経営、ことに大資本の当面の要求に応える教育体制が構想さ

れただけなのだ。真にわが国の当面しようとしている課題を意識し国民全体の福祉をねがっての国民教育の構想でないところに、多くの矛盾がその中にしまいこまれ、この構想の実践的展開の中で激発して行くことになるのだ。

六

与えられた紙数をこえたが、ここで言っておかなければならないことが、ほかにいくつがある。

その一つは、職業差別感・職業の身分的なみかたが、いっそうつよまるだろうということだ。中学校の就職コース出身者の従事する職業は従属的職業であり、進学コース出身者が将来従事することになる職業は指導的職業である、とのみかたはますます強化される。これは、ホワイトカラーへの評価、その名譽水準がぜん次低下してきている世界的すう勢に逆行して、単なる学歴偏重や「白い手」尊重に拍車をかけることになりはしないか。施策は、あるいは指導層と被指導層の分裂を意図しているのかもしれないが、少なくとも二〇世紀後半に生きる人間が、おめおめと身分的差別のなかにくすおれることはありえない。労働大衆の必死の抗争が、この施策のでた基盤をほりくずす公算の方が大きい。これは、自分がなした施策のうちにくまられる矛盾の当然の激発であるのだから、その灰をかぶる覚悟はあるのだろうか。

第二は、六年制高校の構想と関連する問題である。第三学年でのコース分離は、やがて中学校段階における複線型設定にすむおそれがある。進学コース→普通高校は六年制普通高校に、進学コース→職業高校は六年制職業高校に、就職コースは旧高等小学校か乙種実業学校の形態に、というふうに、小学校卒業と同時に、子どもた

ちはいずれかのコースをえらばなければならぬ事態に直面する。小学校卒業年令が、一生の生活の設計をみとおして、妥当なコースをえらびうるような発達段階にないことは、すでに明かにされているところである。教師や父兄といえども、この年令段階で的確に方向づけ、本人の将来の進歩のいかんを予測し、示唆・助言することは不可能であろう。すると、いわばすでに検証済みのあやまりをわざわざおかさうとする愚を演じていることになりはしないか。

こうして、一部の性急な要請に依じて強行される教育施策が生み出そうとしている弊害は、ことのほか大きいことが予想される。その弊害も、ながい目でみて、日本民族の世界の進歩からの決定的なおくれを結果するとみられるので、いっそうだまってはおれないのだ。

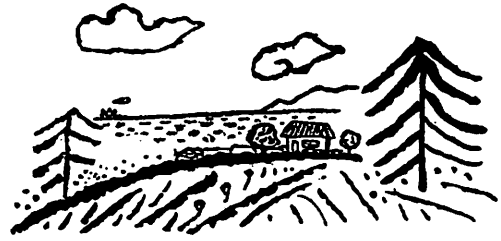
△後藤豊治▽

(三〇ページよりつづく)

み込ませることを防げるかも知れません。学校ではせまい生産技術教育をおしかえし、卒業後の青年たちの生産学習にふりむけるようにして、しかもその青年たちの学習が、現状の「生産能率」にとどまらないような発展をうながしてゆれないものだろうか、と思えます。

そんなための制度は考えません。青年たちの生産学習に、大きな期待とできるだけのテコ入れをしてやることを、中学校の先生たちが卒業する子どもに「約束」してやれることだけが、いまのすばらしい光明だと思ふのです。

(教育評論家)



日教組

教研集会をかえりみて

山口富造
村田泰彦

日本教職員組合の教育研究全国集会は本年で第六次の集会を組
った。

もちろん、多くの未解決な点や反省しなくてはならぬ点は残っ
ている。しかし、職員室の片隅のひとりひとり教師のひそやか
な、かなしみと、いかりと、そしてよろこびをみんなのものにす
るために、六年の長きにわたって營々と築きあげてきた成果と姿
勢は、もはやおしつがすことのできないまでにたくましく結実し
ている。私たち産業教育研究連盟の会員も一組合員として、また
民間教育研究団体の一員として積極的に参加してきた。

科学技術教育の振興が日ごとにやかましく叫ばれるこんにち、
教研集会は第七次研究のしめくりを目前にひかえている。この
ときにあたって、これまでたどってきた研究の道すじを、じっく
りとふりかえってみる必要がありはしないだろうか。

— 編集部 —

職業科のあゆみ

はじめに

「産業教育の振興」というスローガンに関す
るかぎり、それはいまはじめて強調されたも
のではない。戦前のことはしばらくおくとし
ても、戦時中に出された「実業教育振興に関
する意見」(昭十一、実業教育振興中央会、
上下二冊)によっても、しつけ教育、人格教
育を主要な内容とする「低度実業教育」の主
張が当時の軍需産業の中枢をにぎる人たちに
よって強調されているし、敗戦後、朝鮮戦争

をきっかけにしておこったいわゆる特需景気によって刺戟された「産業教育振興」のかけ声は、これまでの「新教育」に一つの翻期を与えたものだった。ほどなく上程された産業教育振興法をめぐる論議の中に、私たちはこゝろの科学技術教育に関する基本的論点を見いだすことができるが、とりわけ、「ともかく早く役に立つ技術を身につけるような、手取り早い教育をやる」(公職会会議録)といった指導者層の考えかたがひとつの底流をなしていたことはまちがいない。

☆ 研究のあらすじ ☆

いまから六年まえの昭和二十六年の暮、日光で開かれた第一次教研は「職業教育」という独立した分科会として扱われた。この中で、目標、教育内容、施設・設備、教師、産振法に対する態度、職業指導など、こゝろにちまひ引統いて討議されている問題のほとんどがとりあげられている。

朝鮮戦争後、いわゆる「逆コース」の政策を露骨にしめしはじめた内外の反動勢力に対する独立と平和のためのたたかいが、民主勢力によってはげしくすすめられたなかで、第二次教研が開かれた。ここでは、「生産教育」

を作文教育や歴史教育とともに、平和を守るための教育のひとつとしてとりあげている。しかし、生産教育が平和を守るための教育であるうとするにはどうあらねばならないか、ということ、つまり、生産教育の性格規定については、かならずしも意見の一致をみたわけではなかった。

第三次教研はさらにすすんで、科学教育とならんで平和的生産人の育成に直結する教育の具体的展開というテーマで、総合開発、軍事基地と教育の問題にまでとりこんでいる。

しだいに強くなる反動攻勢に対して、「教研型」教師といわれるような、意識がとびはなれて高い一部の人たちだけで教研をささえていてはならない。一人でも多くの教師と手を結び、平凡な毎日の実践の中での「なやみをうち明け合い、語り合」うための「仲間づくり」が真剣に考えられはじめたのは、第四次教研からであった。いや正確にいうなら、第三次教研の終ったときからというべきだろう。また、教室で実践している職業・家庭科という具体的な教科を話し合いの中心にするようになったこともみのがせない。

第五次教研は前年と同じく「科学的合理的精神をつちかめようた教育」という部会の中

で、自然科学とならんで「生産を高めるための技術教育」という分科会で扱われている。この頃から、職業・家庭科が普通教科としての生産・技術学習である、という考えかたがはつきりしてきたことは注目される。

第六次教研はさらに、「生産技術教育」という部会の中で家庭教育独立させ、性格、目標、教育内容の意味づけ、労働観など、教研発足以来の問題に筋道をつけ整理した点でひとつの転期を劃するものと考えられる。

☆ 主な問題のすじみち ☆

A 性格、目標について

第一次教研では「勤労の価値を知り、視野の広い能力を養う」、「地域産業の近代化をはかる」、「日本経済復興のための信用の回復」など、なかにはウェーバーの職業観にもとづくところの神に奉仕する精神を説く者もあり一般に抽象的な目標論がさまざまの観点からうち出されている。しかし職業教育を「前進的近代人としての教養」という考えかたに立って、「普通教育と職業教育とは対立するものではなく、調和すべきものである」という点では、共通の理解に達することができた。

第二次教研のテーマは「平和と生産のため

の教育」である。「生産教育」を「平和教育」のなかみとする考えかたに対しては、「完全に外国の軍拡経済の一環に組みこまれた日本の産業のもとでの単なる生産教育、技術教育は、かつての勤労教育や増産教育と変りないものになる」として生産教育に不信を表し、「他国に従属させられている現実を打開」(新潟)することが先決であるとし、この分科会のテーマを「平和と民族独立のための教育」と改めることが主張された。

これに対して、平和と民族の独立を守ることに生産教育の前提であることをみとめた上で、さらに「資本主義生産機構の矛盾をみつけどし、その根本原因を考える人間、さらにその矛盾を打開してゆく人間つくる教育」(青森)であり、そのための「基礎的学習」としての生産教育をすすんで承認しようとする考えかたがのべられている。

この問題は、次年度以降、できるだけ教室内での実践的な問題との関連において深められる必要があるか、その意味において、第四次教研でとりあげられた「基礎的技術とは何か」という討議は、まとまった見解はえられなかったにしろ、好ましい方向といえよう。そして、第五次教研においては、「国民経

済、国民生活に役立つ基本的な、代表的な技術をしっかり学習することにより、その学習の過程や結果をとおして日本の民族的課題とたちむかう生徒の性格形成を意図するとともに、それらの技術のもつ社会経済的意義の学習をつうじて、産業についての正しい社会認識をもつ子どもに育てる」教科であるという本連盟の清原講師の意見にまとめられた。

B 施設・設備について

生産技術教育は、すぐれて実践的な教科である。紙と鉛筆、黒板とチョークだけで教科の目標を達成することはできない。教育内容に応じた施設・設備が絶対に必要とされるが現状は、一部の学校をのぞいてはるかに貧困である。最近の調査によれば、高校では昭和

三三年に文部省が定めた規準の七〇%中学にいたっては三五%であるという。このような現状をどう打開するかということは、第一次からの懸案のひとつとなつてはいるが、それと関連して産振法をどうみるかについて注目すべき意見がかわされている。

すなわち、「産振法の成立をみると、これがMSAなどと結びついていることは明らかで、その趣旨は根本的にまちがっている」(第四次、高知)これに対して、「しかし、

ただ反対だといっているだけではいけない。この法律の適用をうけた学校だけが予算の配分をうけるのでなく、教育費全体を増額してすべての学校が配分をうける方向にすまなくてはならない」(同、傍聴、高野実)という意見がのべられている。

これと関連して、第四次教研では、教研活動のひとつとして産振法の成果と問題点を調査、研究することが提案、採択されている。

さらに、第五次以降、一割にも充たぬ産振法適用校以外に、貧困な施設・設備をなみなみならぬ努力の末に必要な最低限までこぎつけた学校の実践例が報告されるようになってきたことを注目しなくてはなるまい。

C 進路指導について

子どもたちが、能力と希望に反した進路をたどらねばならぬことの多い現状で、さまざまな指導上のなやみが毎回訴えられてきた。

そして、教師自身の中に残っている職業に対するいわれのない差別感をとりのぞくことが大切だ(第一次)とか、働くものの意識と、社会をまっとうにみつめる批判力を身につけさせよう(第三次)とか、いろいろのべられてきたが、とくに第四次教研において、農村の貧困と封建性に関連し、兵器工場や少年自

衛隊に入る子どもと、その教師のなやみが訴えられている。

進路指導は職業科のみで扱われるものでなく、全教科にかかわるものであり、原則的にいえば、第四次教研における島根の報告の言うように、「きびしい現実のなかで社会の矛盾と対決し、生徒みずから与えられた現実から逃避しないで、現実にはちむかい、それを変革していけるような人間」を育成するはずのものであろう。今後さらに具体的な指導法にまで及んだ討論を重ねて、説得力のある成果が期待される。

D 労働観をどうみちびくか

前節の進路指導とあわせて論議されるのは働くことの正しい考えかたをどうみちびくかということである。

「勤労を尊重し、平和を愛好する人間こそ最も価値があるのだという人間観」（第四次、鹿兒島）に立ち、「おのおののもつ技術を愛しよう、勤労を惜しむまい」（同、宮崎）という子どもと教師のすこやかな願いが、現実には社会の障壁によってゆがめられ、働くことがかえって人を不幸におとしいることになりかねない現状においては、働くことのかみについて批判力をもたせることがどうし

ても必要となってくる。この意味で、「農民が生産者でありながら、自分の生産物の価格さえ決定できない矛盾、生産者の労働がなぜ正しく評価されないのか、このことを土台として討議をすすめるべきだ」（第五次、岐阜）という発言は、働くことのほんとうの意味を教える上で、基本的視点ともいえるだろう。

さらに第六次教研では、労働の内容を科学的に研究し、生徒が協同して当るなかで自主的なかまえを身につけ、働くことの楽しみをおこさせるという基本的なありかたについてはほぼ一致したが、具体的な日常の実践においては、なおつかみにくい問題として残る部分と思われる。たとえば二宮尊徳と報徳思想をどうみるか、ということについて出席者の意見はかなりまちまちであった。たとえば、彼を正しい労働観をもった一つの人間像としてみる考えかたが強い。このことについては福島講師が発言しているように、単に節約とか、勤労とかいう徳目を歴史的背景から抽象して評価するのではなく、彼のおかれた社会と現代とのちがいを明確におさえた上で批判することが大切であろう。

E 学習内容の編成について

教育のなかに、かみについての話し合いは、教研

の数を重ねるごとに多くかわされるようにになっている。

英語の裏側におしやられた職家の時間編成上の苦勞、一群から六群までの広い領域にわたる指導上の問題、高校入試による教育内容の混乱など。とくに指導要領についての批判は第六次になって最も重要な論点としてとりあげられている。

指導要領は、農村の貧困の原因をカマドの位置やテーブルの配置などという枝葉の技術にすりかえている、という指摘（第三次、鹿兒島）からさらに第四、第五次とすすむにつれて具体的な実践をふまえて批判し、その改訂をせまろうとする方向にむかっている。

この意味で第五次教研において本連盟の清原講師が、職業科の性格、目標を指導要領に頼るといっているのでなく、自分たちの手で指導要領をつくりかえてゆこうと提案したのについて第六次教研では基礎的技術を抽出する観点や○印の基準性について批判的意見がかわされているのは特記すべきことである。そして、この問題は、一つ一つの教材が現代の生産技術として、どんな意味をもっているかを検討することにより、教育内容を整理し、普通教材としてよりよいものに高めていくべき

である、ということに結論づけられた。

ところで、この教科を普通教科であるとするばあい、これと関連して二つの問題が派生する。一つは男女差についてである。

職業科は男子、家庭科は女子がやるのだという考えがまちがっていることははっきりしているが、いっぽう、「男女差は育児以外には考えられない」(第四次、愛知)さらには「育児についても男女差は考えられない」(同、東京)とする立場にたいして、岩手から現状にもとづいた反論が出されている。結局男女差の問題は地域の実状に照らして実践的に解決しなくてはならぬと思うが詳細については次節にゆずる。

第二に、地域との関連についてである。普通教科としての職家は、一般的普遍的な性格をもつとともに、地域からの影響と地域への影響の強い教科だといわれてきた。これについては「地域の要求にあまり引ずりまわされるというのではなく、普遍性の上に立って特殊性を生かしていく」(第六次、群馬)ことさらに「どんな条件におかれても、それを打開していく能力を養い、従来の既成の概念にひきずられず、むしろ一歩すすんだ新しい技術を身につけさせていく」ということに

まとまっている。すでに第五次教研では、ピニル苗代や土壌の酸土検定などで村の人たちに科学的な農業経営の眼を開かせたことも報告されている。

☆ これからの課題 ☆

これまで論議されてきた多くの問題のなかで、第七次以降とくに説明を要すると思われることがらをひろい出してみると、

第一に、教育内容を明確にしほり、それに対応する教科課程をつくりあげることである。農、工、商、水産、それに職業指導までかかえこんだこんにちの職業科は、そのほう大な領域に目をうばわれて、指導要領に掲げられた項目をまんべんなく消化することに忙殺されているのが実状といえよう。第六次教研において、一つ一つの教科のもっている生産技術的、社会経済的意味を吟味し、技術学習としての系統性を明らかにし、もっと普通教科としての性格をはっきりさせることが必要である、ということが今後の課題として本連盟の長谷川講師から提案されている。

第二に、施設・設備の充実のための基礎となる最低必要基準を作りあげることである。産振法成立以来、ごく一部の学校には相当

の施設・設備がととのったが、それが真に活用されているかどうか、ということ、また、貧弱校とのアンバランスなど解決を要する問題は多い。さきにもべた産振法の成果についての総合調査と批判に関する第四次教研の提案も、いまだ果されていない状況である。

科学技術教育の振興が、教育制度改革の主要な契機として上からとりあげられてきているこんにち、われわれはまずその教育内容をたしかにすること、およびそれを裏付ける十分な予算をかちとることが緊急の課題であって、そのためには、第一の課題と合わせてぜひとも、これだけは絶対必要だという基準を、たしかな根拠にもとづいて主張しなくてはならないと考える。これについては昨年福井の教育研究所で会員の上田氏が参加して各教科についての基準を試算として発表しておられ、また第七次教研のためのレポートにも数多くみられるようになってきた。

第三に、地域の生産構造からどのように影響され、またどのように影響を与えるか、ということである。

たしかに偏狭な地域主義がいましめなくてはならぬ。けれども第一次教研でも産振法一六条(一)は公立の中学校または高等学校卒業後(二)は私立の中学校または高等学校卒業後(三)は農に就事し、または従事し、または従事しようとする

る青少年のために地方の奥地に於いた技能教育を主とする短期の教育別科における教育および学校において社会教育として行うものを含む」を行う場合においては……」について論議されていることでもわかるように、地域の生産構造を近代化するための直接、間接の影響力は無視すべきではない。とくに最近、実業高校附設の産業科、青年学級における職業科目の重視、技術教育センターの設置などがうわさされているが、国民の科学的知識、技術的能力の水準を真に向上する方策の一環として慎重に検討をすすめる必要がある。

第四に、小学校における生産学習をどうするか、ということである。

これまで中学校段階における生産技術学習のありかたについては、教研集会のみならず各種の機会にかなりの研究がなされてきてたが、小学校におけるそれについては、ほとんど未開拓といつてよい。今後、理科、社会科学、図工科など他教科との関連において小学校における生産学習の性格、目標をはっきりさせる必要がある。

最後に、技術学習と人間形成の対応関係を明らかにすることである。

これまでの教研集会では、生産技術そのものの学習については、かなり研究がなされて

きた。しかし、それによって子どもがどう変革され、どんな人間にづくりあげられてゆくのか、ということについてのキメの細かい討論はほとんど見るべきものがない。

職業科教育といい、生産技術教育といい、ともに教育の問題である以上、人間をつくり変えてゆく仕事である。したがって、技術学習の系統性を明らかにするためには、技術学習のそれぞれの学習段階に対応する人間形成が常に考えられていなくてはならないはずである。

家庭科のあゆみ

これまで六次にわたる教研集会をふりかえって、家庭科教育の問題点を整理し、これからの研究活動に、よりたしかなメヤスを立てておくことは必要な手続きだとしても、その整理は、なかなか面倒なことである。各県の報告書と当日の討論とを基にして、「日本の教育」が執筆されるときには、すでにおおかれすくなかれ執筆者の主観がおりこまれていて、オリジナリティーは屈折してゆくの、六

冊の「日本の教育」から、僅かの紙数に、さらに問題点を整理するとなると些かもって自信がなくなる。あるテーマについては、ぼう大な各県の報告書のどれかにおいて、すでに解決済みのものも散見するのに、それらをも概括し、一般化して、「要約」を示すことは、ともすれば危険なあやまちをおかしやすい。ただ、試行錯誤のつまずきを、いくらかでもすくなくしていただくために、ある程度の概括化、一般化は許されてよいだろうという条件付きにさせて頂きたい。

これまでの六次にわたる教研集会における家庭科教育のとりあげかたをみると、つぎのようになっている。

第一次集会 (第十分科会)

職業教育の現状とその改善方策をどうするか

第二次集会 (第八分科会)

平和と生産のための教育

第三次集会 (第八分科会)

平和的生産人の育成に直結する教育の具体的展開

第四次集会 (第二部会第二分科会)

生産技術を高めるための教育(職業・家庭科を中心として)はどのようにすすめるか

るか

第五次集會 (第二分科會)

生産技術を高めるための教育はどのよう
にすすめるか

第六次集會 (第七分科會)

家庭科教育

このようなとりあげかたをみると、とくに
第四次集會と第六次集會が、それぞれに、転
換を示す年になっていることがわかる。その
ことは、たとえば、第四次の「日本の教育」
(以下第何次報告と略す)によると、「この
分科會は、科学的・合理的精神をつちかう
ための教育」を中心テーマとする第二部會の
第二分科會として、今年あたりしく設けられ
たものであるから、昨年までのつみあげと、
直接につながっていない。」(一八九頁)とい
うことだし、第六次になると、「今回はじめ
て、家庭科教育の分科會がおかれ」たもので
「従来の教研集會でも家庭科教育は取り上げ
られてはいたが、それを主題として集中的に
研究する分科會はなかった」それだけに、
「全国的規模における現場教師による自主的
な家庭科教育の研究は、ここから始まったと
さえいわれるであろう」(二五一頁)という
のが実情である。

したがって、家庭科教育の問題点を整理し
て、今後のみとおしを立てるには、それらが
集中的に表現されている第六次報告を手がかり
にして、いくつかの柱をたて、必要に応じて
て前年度の報告と比較検討する手順ですすめ
てよいとおもう。

第六次報告によると、その内容は、「家庭
科教育の現状批判、その原因分析、家庭科の
性格、目標に関する本質論、学習指導要領の
検討、地域生活の実態、家庭科に対する父母
の要求、学習指導計画の実例、施設設備の
実態とその対策、家庭科教師論等々」(二五
二頁)これまでの集會で断片的、散発的に報
告されていた課題が、一挙にして出揃った感
をうける。

そこで、これらの報告が、どこまで整理さ
れ、どの部分が今後の課題になるかについて
以下三項目にわけて概観してみよう。

一、家庭科教育の本質論

家庭科に対する基本的な考え方については
第三次集會から逐年とりあげられ、教研集會
に関する限りでは、従来の家事・裁縫科的な
技術主義は否定されてはいるけれども、現場
の家庭科教師のなかには、いまだに単なる技
術主義教科とみているむきもすくなくない。

教科として成立する基盤をどこに求めるか、
家庭科の目標や性格をどうとらえるかは、困
難な仕事ではあるが、やはり、はっきりさせ
ておくべき基本的な課題のひとつである。

第六次報告では、この点については、熊本
の報告書が引用されている。それは、「現代
日本における民主的な家庭生活をはばむもの
は、歴史的に根強く植えつけられた封建性と
非科学的な生活様式による不合理性である。
これらを除き、正しい家族関係を打ち立
て、民主的な楽しい家庭生活を建設する、よ
い家庭人を育成する。ことは、家庭科の本質
的なねらい」(二五八頁)であり、家庭科は

「①生活技術を通しての教科、②総合的な実
践指導としての教科、③生活課題解決のため
の生活処理の教科、④再生産的技術の教科」
(二五八頁)というように、その基本的性格
を規定していることが注目される。これは、

小野テル講師が、「家庭科の本質を、主とし
て物に関する生活様式の側面と、主として精
神的な家族関係の側面との二面から考えた
い」(二六一頁)という助言や、桑原次講
師の、「家庭の民主化(人間関係)とともに
合理化(生活様式)は家庭科教育の基本的課
題である」(二六一頁)とするところえかた

ともに、ひとつの方向を示すものである。

この場合の民主化と合理化との関係をどのように矛盾することなく理解すべきかについては、たびたび討論の対象になっている。たとえば、第三次集会においては、「台所が能率化したために、農家のお嫁さんが、かえって労働過重になって、かまどのそばに坐っていた方が救われる」(九一頁)という例。また、第五次集会では、「家庭の民主化や家庭生活の改善が、話しあいでも解決されると考えるのは、サラリーマンの家庭を予想した教育で、東北の農村では、それでは解決されないぎりぎりの立場におこまれている」(一六四頁)とか、第六次集会でも、「洗たく機の購入で労力の節約はできたが、それで浮いた時間は、さらに野良仕事に追い立てられ、結果的には、かえって負担過重になった」(二六三頁)とかいうものである。いずれも、家庭科の本質究明とは切り離しえない報告であるが、これらの点については、さらに第六次報告で、次のようにまとめられている。すなわち、「非民主的人間関係が支配するところでは、自然科学的合理主義は、せまい限界の中にとどまらざるをえないし、部分的合理主義は、かえって全体としての不合理を増大す

ることさえあるという矛盾」であり、「このことは、逆に合理化が人間関係の矛盾を鋭くすることによって、民主化を促進するテコとして作用する」ことも考えられる。「要するに、民主的人間関係という基本的立場に立って始めて生活の合理化は徹底する」(二六三頁)というように、民主化優位の原則が示されている。

しかし、なお家庭教育の本質に迫る研究に乏しいし、家庭教育をつらぬく原理については、割り切れないものがこのころ。

二、教育内容の基本問題

教育内容の編成をどうするかという問題は当然のことながら、学習指導要領の批判的研究、小・中・高一貫したカリキュラムの編成基礎技術や技能の選定とその系統化、学習内容の最低必要量の設定、地域性と教育内容、他教科との関連、男女差の問題などの解決に結びつくことである。これらの諸問題をひとまず二つの側面から整理して問題の所在をつきとめたい。

(1) 学習指導要領の研究

家庭科の本質が必ずしも明らかにされていない現在では、学習指導要領のうけとりかたが、家庭教育を左右することはあらためて

ふれるまでもない。旧学習指導要領(26年版)についての研究報告は、第二次と第三次報告に一度あらわれているが、新指導要領(31年版)の批判的研究については、第六次集会をまたなければならぬ。

第六次報告では、小・中・高、それぞれの学習指導要領が検討されている。すなわち、小学校のそれについては、「性格、目標については、ほとんどすべての府県が賛成でありひとしくその進歩性を認めた」という。「指導要領の説み方は必ずしも一義的ではない」(二六五頁)が指導要領の、「目標の規定全体が、人間尊重の立場で貫かれている」(二六六頁)ことが確認されている。また内容については、賛否両論はあっても、「おおむねそれを支持する傾向が強い」(二六七頁)という。目標の進歩性と内容とのかい離があるとすれば、やはり今後の課題として研究されなければならないはずである。

中学校の指導要領については、その「目標規定がきわめてあいまい」(二六七頁)だという点で一致している。それは、「職業科」と家庭科とを結びつけた「職業・家庭科」という不自然な教科の性格」(二六七頁)に由来するという論議に発展し、「理論的にも、

運営の実際からいっても、当然に家庭科は独立すべきであるという結論に到達した」(二七一頁)また内容については、○印(共通必修内容を示す)に対する批判が強く、とりわけ、「家庭の民主化という基本問題からみれば、男女共通学習の内容として、もつとも重視さるべき家族と家庭経営が、はずされているのは不当」(二六八頁)だという批判の多いことが注目される。このように、中学校の指導要領は、今後とも全面的に批判研究がすすめられ、雑多で系統性に欠ける教育内容を整理しなければならぬだろう。

高等学校の指導要領については、小学校・中学校ほどには研究されていないようで、結論を導き出すことが困難である。当然、今後の課題とされるところである。

(2) カリキュラムの編成

カリキュラムを編成するうえで、諸問題のなかには、時間的には二つの流れがある。ひとつは、これまでの教研集会でとりあげられていながら、解決には至らない古くからの課題、たとえば、ミニム設定の仕事、地域性Ⅱ地域の実態と父母の要求Ⅱのとりいれかた男女差の問題、などがそれである。他は、この一―二年来、とくに問題とされている比較

的あたらしい課題、たとえば、基礎技術や技能の選定とその系統化の仕事。小・中・高一貫したカリキュラムの編成などである。両者の関係は、本質的に異なるものではないが、家庭科の教育内容に関する研究が質的に高められつつあることを示している。

そこで、古くからの課題であるが、たとえば、第三次報告では、「学習内容の最低必要量をきめること。それには現在の産業構造と将来の姿を展望し、それに対応できるように内容をもちたものにする」(八六頁)という原則的な方向がたしかめられていたり、第四次報告では、実態調査と地域性についても一応のまとめが示されている。すなわち、「実態調査ということも、その生かしかたが問題になる。うっかりすると地域性にしばられてしまうこともありうる。技術の中には、すぐには役に立たなくても、将来はどうしてもやっておかなければならぬ技術もある。だから地域の要求といったものも、あまり直線的にとりあげるのではなく、この根底にある基本的なものを取りいれるべきではないか」(二〇五頁)という。また、男女の差による教育内容や指導計画のたてかたについては、第四次報告での結論として、「男女差は本来はな

いもので、他からの意識でおしつけられたものであり、指導の仕方では、そのひずみは、とり除かれることがはっきりした」(二〇七頁)ことが、討論の過程で示されている。また、基礎技術の概念については、充分、納得のゆくものではないにしても「基本的なものを通じ、他の技術がそこから発展していくようなものでなければならぬ」(二二二頁)ことが一応の結論として示されている。

以上の諸点は、教育内容の問題としては、いわばいずれも基本的原理を確認した段階であり、これを適用し、ほりさげて、たしか教育内容を実際に編成する仕事は、当然それに引続くべきものである。この一―二年の集會では、ようやく、そのことが、軌道にのってきたとみられる。すなわち、第六次報告のなかで、カリキュラム編成の主題となった「小・中・高一貫したカリキュラム」編成のためには、必然的に、小・中・高それぞれの段階における教育内容があらためて確定されなければならないし、とりわけ基礎技術や技能の選定と、その系統化の研究が、主要な仕事となる。(この点については、連盟の家庭科研究部会の中間報告にくわしい)そのことは、第五次報告のなかでは、「中学校女子で

は、洋服では、私たちの身だしなみに必要な衣服として運動シャツ、ワンピース、スカート。和裁では、基本ぬいとその総合としての

大裁ひとえ、が必要である」(一六六頁)というミニマムのひとつのおさえかたが報告されている。同じく第五次報告の、「小・中・高校の一貫性を重視し、系統的学習の配列を考え、教科のバックボーン題材に、家族・経理をおき、中心題材に食物、保育・外辺題材として、被服、住居を配する」(一六六頁)という枠組の再検討とか、それにたしかかな内容をあたえる仕事も同様の傾向を示すものである。つまり、これらは基礎技術や技能の選定とその系統化という大きな仕事に深められてゆくべき意味をもつのであり、家庭科の教育内容をしっかりとおさえることが、同時に家庭科の本質論とたえずジグザグに往復しながら、両者をゆるぎのないものに高めてゆく過程でもある。

そのことは、ミニマム設定をひとつととりあげても、家庭科の本質を把握する視点と結びつくものだということが明らかであろう。

小・中・高のカリキュラムの一貫性をはかる仕事は、これまでのところ僅か一二の県ですすめられているにすぎないが、第七次集

会では、さらに多くの研究が報告されるものとみられる。

三、施設・設備と教育方法

家庭科は、学習形態からみれば、実習の比重がきわめて大きい。そのため施設・設備の貧困が、すぐ学習形態や学習意欲にハネかえる。これまでも集会毎にとりあげられながら教育予算の増額という原則的な方向が示されただけで、一向に発展していない。国民教育の場において、施設・設備の面で、学校間に大きな落差のあることに対する憤りが、なかなか実を結ばない。しかし、たとえば、具体的に、同じ地域の数校の施設・設備の実態調査から、解決のメドをつかんだ例とか、積極的に家庭科教師が、貧しい条件のもとで研究授業を敢えて行うというかたちのデモンストレーションなどから成功した実践例は出てきてもよさそうにおもう。さらに、施設・設備の貧しいなかで、第五次報告にあるような、「家庭のプロジェクトと学校のプロジェクトを一致させた」(一六五頁)りして、施設・設備の充実をふまえた教育方法についても、経験の交流がのぞましい。また、これまで、「実習」すべき教材と考えられていたものが実は実験とか示範による指導形態で、じゅう

ぶんだったという研究もあってもよいだろう以上、主として、第六次報告をよりどころとして、今後の教研活動にそなえる手だてにしようという意図であったが、屈折の度合がひどくなければ幸いである。

(27頁よりつづく)

ほくはすっかり打ちのめされていた。こうした具体的な思考法を身につけていないかぎり、どんな議論も空論である。

だがひるがえって、部会の討議において、父兄への対策が、まったく論じられなかったのはどうしたわけだったろうか。いまの政府の反動的な文教政策が、これら市井の善意ではあるが、しかし弾力性をかいた大人たちの思いこみに、どれだけ助けられているかということは、ここにわざわざ附けたすまでもない。いや、いったいに現在という時期が、教育をすすめるうえで障害の検討と対策に、現場にいるほくたちみんなの総力が、かたむけられていいときだ。しかも歩みは遅々として、牛の歩みを思わせる。言いのこしたほくの最大の不満はそこにある。

でも、もう一度言おう。功をあせるのは、それこそむしろマンネリズムであり、遠くを見すえていない証拠である。ほくは教研に参加して、やっぱりよかったとはっきり表明しておきたい。(都立広尾高校・市川哲夫)

教研集会にのぞんで

各県会員からのレポート

地方組織を強化するにはどうしたらいいか。教研活動の中で連盟はどんな役割を果たしてきたかを率直に反省する連盟の地方実践家たち

サークルを育てよう

△埼玉県▽

一人の百歩より百人の一步前進という合言葉に従って今年も又我々のサークルから県集会へ代表者を送り(第五次・第六次教研には全国集会にも代表者を送った)私も共同研究の一員として傍聴した。

参会者は必ずしも多いとはいえず、その全部が中学校の職業担当者の集りであり、従って討議も中学校の職業科をとうしていかに生産技術を高めるかという事であった。参会者も年々かわっていくことは、この教育と真剣にとりくむ教師の層が厚くなることによるこ

ばしい事と考える。しかもわづかではあるがサークルや地域主任会の代表等の形で日常の共同研究結果がもちよられた点大変よろこばしい。特に強く感じたのは、時折連盟紙上でみる教材選定の理由とか、いかにしほるかというところあるいは我々の意図する教育はすぐ役立つ職業教育ではなく一般普通教育としての技術面を学習させるといふ基本概念については参会者全員が共通理解に達している。しかし、持ち寄られたレポートには未だかなり

性格や目標について検討を要する点今後の研究が必要と考えた。ただその中において、第一群を例として教材を如何にしほり、しかもそのしほった一つ一つの教材について各基礎的要素作業や関係知識をどの教材でどのよう

に重点指導するかについての新しい研究が報告されたことは特筆すべき事と考える。

さらに現職教育の問題に関連して職家の教員養成問題が討議され、特に本県の大学の現状と今後の大きな奮起についてするどい批判が出たことについてまことに同感であった。

(埼玉県用土中学校 卜部太郎)

もっとつつこみを

△京都府▽

教研京都集会は十一月十六、十七日の二日間開催され、「生産技術教育」の分科会に参加する機会を得たので討論の経過及び結果から、この分科会に対して私の感じたことから、まとまらぬままに書きつらね教研京都集会参加の報告にかえさせていたたく。

この分科会における討議主題は

- 1 生産技術教育と科学技術教育の関連
 - 2 小中高の生産技術教育をどのように進め関連づけるか。
 - イ、学習内容のとりわけ方について
 - ロ、技術指導のあり方について
 - ハ、勤労態度の育成について
- の三点であった。本年度は昨年迄の任意参加

と異り、教組各支部から代表者一名が出席しこれを正会員とする形式をとったがため、各分科会とも昨年迄よりも参加者は少なくなつたが、本分科会は正会員の欠席等より特に少なく極めて淋しいものであった。その上参加者の多くは生産技術教育に対する突込ということが不足し、実践の結果が発表されたが、実践を通しての発言というものが少なく、消化されない理論を述べるといのが多く、昨年迄の研究集会における成果の上に本年度の研究をつみあげるといふことは不十分であつた。くわゆるに司会がまずく、分科会にあてられた時間は相当あつたにもかかわらず、時間の空費が多く、又講師の助言も適切さを欠いた点が見出されるなど、本府の教研集会における本分科会のもち方、進め方について反省と検討を加え、明年度よりのよりよいあり方を打出すべきであると考えて。更に残念に思うことは全国集会参加代表の決定に対して、本部が代表者は各郡もちまわりとするという基本線をもつていたため、貴い実践と研究を続けている人を本分科会の全国集会参加の代表として選出出来なかつたことである。

(京都府亀岡市船南中学校 世木郁夫)

しつかりした

調査にもとづいて

△埼玉県▽

十一月八、九日の両日、和紙の産地、小川町で家庭科の県集會が開かれた。

正会員十二名、傍聴者十名たらずで、これは生活指導を筆頭に道徳教育、国語、理科、数学、芸術、保健、社会などに比べ、はるかに少ない参加者であつた。殆んどが農村地帯からの参加者でありかつ、小中学校に限られていたことも特徴であつた。

とりあげられた問題は次のようなものであつた。

一、子どもや父母は家庭科教育をどのよう
に受けとめてゐるか

二、地域の生活実態とその課題

三、埼玉県家庭科カリキュラムの検討

四、家庭科教育実施上の問題点

第一の子どもや父母の声によれば、農村の食生活の改善、家事労働への家族の協力、その他家族関係の民主化などについては、家庭科は子どもや父母の要求に合致し、学校教育を通して、地域の家庭生活に指導性を發揮し

ている様子が、面白く報告されて参考になつた。

家庭科の男女共学に関しては、農村地帯では支持されていたが、都市的な地帯ではあまり支持されず、とくに父母からは男子には裁縫、あみ物は不用とされ「家庭科などは総花的教育の所産で、教育が安易に流れる禍根となるう。もっと力を入れなければならないところが他にあると思う」といった酷評さえ聞かれた。

討議では、これら父母の声のうけとめ方について、その生活背景との関係で理解し、教育内容検討上、参考にすべきものと、逆に直接または子どもの教育を通して、父母の理解に訴えていくべきものがあることに注意していくようにと話し合わされた。ここでは家庭科の性格にふれて結びとされた。

第二の、地域の生活実態とその課題、では家族関係、家庭経営、食物、被服、燃料、その他さまざまの一般的な実態調査がたくさんに報告された。しかし、調査の目的が漠然と一般にすぎ、大切な次の教育内容の検討に即応して、合理的に行われていないうらみがあった。そこでこのような一般調査は、その内容を皆で協議して、都市、農村別に定期的

に教育局も協力して全県で行っていくことにし、今後はもっとカリキュラム検討に必要な目的の絞られた、はっきりした調査をやるようにしようと話し合わされた。

第三の、埼玉県の小中家庭科カリキュラムの検討については、なお問題意識もあまり成熟せず、残念ながら自由に吟味するまでには到らなかつた。ここでは指導要領の拘束の大きいことも感じられた。この問題は今後の大きな課題としていきたい。

第四の、家庭科教育実施上の問題では、いつものように施設設備の問題も出たが、小学校五、六年の担任問題をめぐって女教師側の職業意識も吟味されていた。地域によっては、自主的な家庭科の共同研究体制の芽ばえも報告されて皆のよい参考になった。

全体としては、なお一般的な実態調査が報告書の中心をなしていたように思う。参加者はみな、困難な条件の下での非常に熱心な実践家で、現場の努力がにじみ出ていた。時々はさまれる桑原講師の助言は論理的で、実践の整理にプラスされているように見受けられた。

(埼玉県教育研究所 西尾幸子)

機関誌を活用しよう

〈北海道〉

十一月九日より三日間道央の旭川市で第六次の集会有り第五分科会で小中高校の職業(生産技術教育)家庭科教育をどう進めるかを討議した。後志地区代表として全市の仲間から笠谷先生が参加した。私達のグループが全道集會に四回と長野、松山の集會に出席したがこれ等の反省から、自分達だけの研究内容をコンクルのな発表は避けて、あく迄現在共通の問題を採上げ討論することによって職業教育の本質を正しく把握し明日への教育に役立たせようと意図していたが、まだ會員全般にそのような心構えが不足でありコンクルの域を脱しないうらみがあった。

三日間の討論内容を整理してみると、

- 一、小学校家庭科を中学校職業科(職業科と家庭科ではない)はどのような面で異り、どの面で共通の立場をもつか。―性格、目標、内容、方法など。
- 二、教育内容の選定とカリキュラムについて指導要領の受けとめ方―地域性と性別、共通の学習内容、群別と時間配当、教材のも

つ意義など。

三、学習指導

○この教科の学習指導(技術教育を通しての)あり方

○単元の位置づけ(他教科、群の系列)

○計画的学習指導(生徒の興味や能力、学習時間内にある諸問題)

○評価(重点目標、評価の時期方法、遅進児の取り扱い)

○教育資料の活用(能率化)

○指導形態(グループ、H・R一斉授業)

○学習環境の整備

○その他

四、施設々備

現状の理想、獲得のための手段

五、担当教師と外部との関係

文教政策、他教科の仲間と小中高教師の連り、父兄その他学校をとりまく一般社会

六、私達自身の問題

能力、研修時間、仲間造り

七、小学校家庭科、中学校職業科の将来

八、残された問題

○効果的な学習指導の進め方

○正しい勤労感の培い方

○高校入試による職業科教育のゆがみ

○教師の問題のとらえ方と研究態度

以上概要を述べたが、本集会ばかりでなく私たち余市の研修会として各種研究会に出席して考えさせられ悩んでいることは

一、発表が単なるコンクールに終わっていないか。—どの教科でもいえることだが、発表のための発表で何か知ら競っているにすぎない。じっくり一つの問題にとり組んで話し合うことが大切ではないか。従って集会の事前の連絡研究がより重要で効果的である。全道でも全国でも同じだが他人のレポートを充分読んで討議を効果的にすべきである。

二、一校の研究にとどまらず地域的サークル活動を盛んにし教科の本質を正しくとらえるべきであり、広く全国内同志の文通をなし研究の交換を計るべきである。—これを利用効果的にするためには機関誌を大いに利用すべきである。

三、研究発表することにより終ったのではなく新しい問題を発見し内容深くつつむためのものであることを忘れてはならない等々である。

(北海道余市町・大垣内重男)

一人の百歩より

百人の一步を

△新潟県▽

三十二年度新潟県教育研究集会(県教組・県学協主催)は十一月二十二日から三日間、小出町小出小学校で開かれ、教師、母親、青年代表など県下各地からの参加者約八百人、終始、活発な討議をくりひろげ、現場の悩みや実践を話合った。本年は分科会も昨年より三つふえて二十を数え、出席者はいずれも各支部での討論を集約して持寄っただけに、なかなか熱のこもった討論ぶり、教研集会も七次を重ねてようよう板についた感じだった。今年は、とくに次の三つが特色としてあげられる。

①「平和を守り真実を貫く民主教育の確立」を基本目標に開かれ、昨年の第六次集会以来ひとときわ激しくなってきた道徳教育、勤務評定など一連の流れを現場の教師たちが、どのように突きつめていくかという点で注目された。

②現在教育委員会、教員組合主催の二本に分れている教育研究会を(A)二つの教育研究会

にそのつど出席しては教師は過労になり十分研究できない。(B)教委側主催の教育研究では、天下りの教育法を押しつけられる危険がある。とし将来一本化しようというねらいがあった。高田、佐渡、柏崎など六支部ではこの両者を一本化した形をとっている、この傾向は今集会を機会に「教組主催の教研集会がこのように充実したものである以上、同じものを教委で行う必要はない」としてさらにその意見は強まったようである。

③なおこの集会では二十分科会を通じ三十三の研究発表が行われたが、総体的にみて各現場における経験報告というものが多かったこの点講師団からも単なる資料のら列ではなく、ハッキリした研究目的のもとにその資料の因果関係を十分説明出来るまでに研究する必要があろう、と指摘された。しかし研究方法では、有志教員グループによる共同研究の多いが目立ち、取残される教師をなくし、中央の圧力からこれを守るために、「一人の百歩より百人の一步」を呼びかけている県教組の方針が着実に成果をあげてきている。

以下各分科会のなかから生産技術教育について研究討論の内容を紹介しよう。

(生産技術教育)

この分科会では討議のすすめ方として

- 1 技術教育をいかに実践するか、a、技術教育の在り方、b、技術教育の内容と方法
- 2 教育計画とその内容の研究
- 3 技術教育実践上の障害とその対策の究明等の柱を立てて考えたが、技術教育のあり方と技術教育実践上の障害を中心に論議が進められたようである。

まず「科学技術教育と生産技術教育について」から論議に入り、前者は科学的法則に従って、物事の処理、又物と物との関連性について、科学的に処理し得る技術であり、後者は科学の法則を基盤とするのは同様であつても、物を生み出す、即ち物を生産するための技術を主体として、その生産はあくまでも経済的価値というものを併なうものでなければならぬ。等々、いろいろの概念づけが主として論議された。しかし中学校の教師として又教育の本質からして、そのような議論よりもっと具体的な面、即ち現場における問題を解決すべきであるとして、例えば基礎技術とは (1) 科学性の裏づけのあるもの (2) 系統的でかつ発展性のあるもの (3) 教育的価値のあるもの (4) 頻度数が多く共通的なもの (5) 経済的・社会的知識及び技能の合致したも

の、これらを基盤にするけれども成長、発展地域性又小学校の場合や、中学校における基礎技術というように種々の条件により異つてくるといったことが語られ、更に毎年の事ながら地域性の問題、各教科との関連、小中高の関連の問題、勤労意欲の向上等について論議された。しかし具体的な方法意見や、結論としてなく、小中高の関連については各々独立歩の傾向にあるからよく話し合いをすべきであるとか、数理社の各教科と充分関連をとる必要があるといった論議の程度で時間切れとなるが多かつたようである。

なかの生徒の勤労意欲の問題にふれてみると、小学校時には生徒はけつして勤労はいとわれないが、中学校に入學してから高学年になる程、勤勞を忌避する傾向にある。それも第二群の工作、機械分野の勤勞は非常に好んでやるが、第一群の勤勞となると大変に嫌う、これの原因として (1) 戦争中の如く盲目的に勤くを善とする勤勞觀念を先生がまだ扨拭できないでいる。 (2) 生徒は勤勞の成果が目に見えて表われるものに興味をもつ傾向がある。 (3) 第一群の生産過程が長期にわたる等が考えられるなど、この解決策としては「苦しい勤勞の結果は必ず自分のものとなつて報いら

るよう即ち勤勞が正しく評価されるべき条件をつくり出す様研究して、新しい勤勞倫理に目ざめさせるべきである」とされた。

さらに技術教育実践上の障害とその対策究明として、(1) 施設、設備は現状ではできる限りその限度内で効果をあげるようにすると共にその筋に施設、設備の充實を要請する。(2) 教師の問題では、技術講習の回数を多くし、できるだけ他の群も教えられるようにする。

(3) 地域性からくる障害としては父兄の認識不足、進學のための予備校の性格からくる技術教育の輕視、(4) ある面の技術のみ重視せよとする地域的要求等、実践上の障害点が語られたが、これという具体的打開策の発表もなかつた。結局、研究は抽象的な理論に流れ具体的な研究面不足、もっと実践を通しての研究であるべきで、一枚のカリキュラムの研究で終つても、いまだ現場に立脚した研究をすべきではなかつたかと反省され、更によりよい研究成果をあげるために来年度の研究課題を語合つて散會した。

(新潟県高田市大町中学校 林 勇)

見たこと聞いたこと

〈東京都〉

さいしょに結論を言っておこう。今年の集会は、例年にならない成功だったのではないだろうか。出かけるまえ、ぼくは二、三の人から聞かされていた。家庭科部会というところは進歩主義の理論家と、経験主義の技術家とがしのぎを削ってわたりあい、まかりまちがえば、たがいに平行状態のまま、無限のかなたへつつ走ってしまうとか、なにしろ女の集りですからね、一度つまずいたらことなんですよ、とか。つまり、そんなところへ好んで出かけるおまえは、よほどのもの好きだという意味のようであった。

真相は知らない。しかし、かりにそんな前例をもちださなくても、こうした点で対立がなく、討議が円滑にすんだことは、やはり成功の第一にあげてよいことのように思う。報告には、なるほど教科目標の追究だけを目ざしたものが数篇あったし、技術の領域でもそれに終止しているものが目についた。討論がまた、そうした断層の所在を証明するかのよう、一たん話が技術的な面におよぶと、

もう「理論」には二度ともどつてこない有様だ。そこにはべつな空気があった。前者では熱っぽい学習的雰囲気。後者はとめどないおしゃべりの調子——。

戦後十年以上たったこん日、いまもって教科目標の検討に莫大なエネルギーのついやされてこの状態は、奇妙といえ、奇妙このうえない。男の子にパンツを縫わせる必要があるかどうかといった問題が、けんけんごうごうの論争をひきおこす図などは、笑えない茶番劇と言いたい感じさえるのだ。

しかしそのわずか数日まえ、ぼくは都高教の英語部集會に列席していた。そしてそこでは英語教育の目的が、——英語が世界語だからというただそれだけの理由で、すでに自明のこととして処理されてゆくのにぶつかっていた。ぼくは不審でならなかった。それがどうして自明なのか。人間形成という未来にひらく求心的な方向は、戦後教育をつらぬく基本の理念のはずである。そのとき、このもつともらしい理由は、どんなふうに基本理念とかみあうのか。ぼくたちは、もう一度、具体的に考へてみる必要があるようだ、英語を学ぶことによつて、子供たちが、何をうるかということを。——してみれば、一見停滞して

いるかにみえる家庭科のこのバカむきさは、逆に家庭科が、いきいきと胎動している証拠とも言えるのである。

二日目の夜、ぼくは数名の仲間の小学校教員諸姉と、ある種の飲料を口にくみつつ、歓談する機会をえた。そしてそうやって話していると、なんと彼らのわかわかしく、けなげでとらわれない正義派だったことだろうか家庭科の実態がどのようなであれ、こうした人たちが家庭科を背おって立っている事実は、頼もしいかぎりに思われた。同愛の士があるという実感ほど、ぼくたちを勇気づけるものはない。ことに状況が不利な場合ほど。こうしてぼくは今次の集會を成功だったとする理由の第二として、会員相互のあいだに、上のような連帯感が確保された点をかぞえなければならぬ。

もちろん、難点は、見つけようとすればいくらもある。げんにこれらの会員諸姉が、仲間のあいだでは実に見ごとに肩を叩きあっていたものの、中学校教師には、必ずしも心を開ききるまでにはいたらなかったこと。参加会員の大半が、三十才以上の年配者だったこと。まして会員中には、年長者で、若い教師をおさえつける者がいたり、たまたま来会し

ていた都指導部の主事に、会場係の承諾もなく、会員の弁当を提供してしまふというような過当な奉仕をする者がいた例なぞ、問題とする者がいなかっただけに、見すごしがたく思われた。ことは些末に似ているが、しかしこうした日常的行为のうえに現われたものこそ、かけ値のない人間の本音なのではあるまいか。しかもそれだけが、よくも悪くも教育を支える根底の力であることを考えれば、重大視せざるをえないのである。

ただそれでもなお、ぼくが希望をのべる所以は、彼らが身のまわりの権力主義者に対して、うつぼつたる斗志をくすぶらせている事実を知ったからであり、また、その飾らない人間的な弱さに共感したからにほかならない。

教研集会が終ったのち、参加した一般高校教員のあいだでは、教研無価値の声がたかいらしい。ことに数回の経験者においてわかりだ。言うところは、集会在、現場にかえってすぐ役立つような発言にとぼしいこと、毎年同じ内容のむし返しが多いこと、小、中校と高校では、教育の狙いに開きがあること等。こうした話を聞くにつけ、ぼくはますます確信をふかめた。教研集会は、そんなところに

意味をおいてはならないのだ。それらの問題は、ぐうぜん家庭科部会でも、要請のかたちで提出されていた。そこにはたしかに当然と言ってよい批判の面がふくまれている。だが考えなくてはならないのは、即製の答をもとめる心が、自分の学力をはぶこうとする怠惰な精神につながっていることだ。そしてむしろ返しを軽蔑する態度が、思いあがった独善に通ずるということだ。むしろ経験者ほど冷淡になるらしい事実のなかに、ぼくはぬぐいたい教員根性のあらわれを見るような気がするのである。

ぼく個人にかぎって言えば、小、中校の諸兄姉にくらべて、高校教師の抽象性を、おりにふれ省みさせられたことが、今次集会での最大の収穫であった。

とくに感銘ふかかったのは、初日の夜におこなわれた地域の父母との懇談会の一場面であった。質問が、つきつき父兄から発せられる。それらは申しあわせのように、家庭科に関連するものばかりだった。それも——男に裁縫は意味がない。どうせ縫っても下手で着せられない、もっと実さいに使用できるものを。——といった、戦後の民主教育の障害の筆頭は父兄ではないかと思わせるような、無

理解なものばかりだ。しかも教師側からは、いっこう的確な答弁があらわれない。ぼくはひそかに先生がたに、声援をおくらずにはいられなかった。そのとき、一人の青年教師が起ちあがった。彼は自分が今年はじめて家庭科を担当した者である旨をつけ、こんな話をきりだした。——自分は男女両方が、しやすい材料からはじめることにした。リンゴの皮むきをえらんだ。めいめいに一つずつ持参させ、むかせた。一人の男の子が、むけなくて困っていた。すると隣の女の子が、むいてあげようと手をだした。男の子は、すぐ頼んだそうして女の子がむき終ると、ありがとうと言いながら受けとった。大事なものは、男の子が困っているのを見て、女の子が助けてやったということと、助けてもらった男の子が、感謝をしたということです。ご家庭でも、お父さん方が、お母さんに仕事をたのまれることがあるでしょう。しかし仕事ですんだときありがとうと、おっしゃる方はないと思えます。家庭科は、そういうことを教える科目です。——見ごとだった。これほど具体的に、簡明に、核心をついた言葉はないにちがいない。しばらくは、一人も発言する父兄がなかった。(20ページにつづく)

地域の生産学習にひかりを

重松敬一

二つの疑問

今年もまた、甘藷を植えて、がんばりました。しかし今年も、みんなの努力と期待をうらぎって、十三俵といふかなしい結果でした。しかも値段ときたら、一俵が一五〇円から一八〇円という安さで、二重の腹立ちを感じながら、細々と収かく祝いをやりました。このとき、みんなの気持が、しぜんに、「なんで、こんなにできなんだろうか？」ということ、

「なんで、こんなに安いだろうか？」

という二つの疑問に集中し、しんげんに話し合いました。

二十三俵から十三俵にへったことについては、いろいろと技術的にも、そして手入れのしかた、肥料の関係や天候の關係などがあつたことを反省しあつたのです。この話し合ひは、さらにすんで、「なんで、いもの値段が安かつただろうか？」ということ、ゆきづまってしまいました。

(中略) E君はいいました。「来年は甘藷なんか作つたつて、とても売れらあせんぞ。もっとなんか、ほかのもので金になるものを作らんと、いけらあせんぞ」

そこでみんなが話し合つた結果、「こんどつくるものは、その将来性や販売面を十分研究して、とりくまなければならぬ」ということになりました。

またA君がいました。

「ラジオは言つとつたぞ。今年には神武天皇らしいの好景氣だつていや。だけど、うちら百姓は、ひとつキラクにならぬではないかいも米も、その他農産物はどんどんやすくなつちやつて……なんだだろうか？」

村

のなかに六畝の共同畑をもっている青年団。その実践記録の一部分です(鳥取県東伯郡大栄町青年団Ⅱ第三回青研全国集会の報告書から)。どこの地域にもみられる問題のようです。そしていつもおそらく、こういう疑問が出ているのだけれども、いつの間にか流されてしまうのです。発言のねうちさえ、周囲の人たちがつかみとらないうちに、集団のなかでアワのように消えてしまうのでしよう。たえず頭にごびりついていたのに、この青年が、だんだん親父になるにつれて……。

それは二つの疑問が、別々にちがつたすじみちによって「解決」

されていくからです。「なんで、こんなにできないんだらうか？」
というのは、農業経営のくふうや技術をとり入れることによって。
「なんで、こんなに安いんだらうか？」のほうは、青年みずからが記
録しているように「しかたがない。さわいだってどうなるものか」
といういい聞かせの処世術によって。

二つの疑問の解明が、よりあってこそ、日本の新しい農民像がえ
がき出せるということは、理くつでは分っています。しかし、その
より、合わせを明確に実践にまでたかめている例が、まだ大へんすく
ないのです。

それは、地域に「より合わせら」れる指導者が少ないということ
が、かなり大きな原因だと思われまゝ。それでも数少ない実践では
あるが、地域のすぐれた技術指導者と結びついた青年たちの共同学
習が、しだいに「社会教育における生産学習」の実体をつくりつつ
あります。

共同プロジェクト

一 一つの疑問が平行して出てくることに、生産学習の芽があるよ
うに思えます。その芽が自主的にふき出す過程は、前記の例
でいえば、①共同で考え合う集団があったこと、②共同の仕事（実
践）があったこと、③その仕事を高めようという共通の目的と方向
があったことです。

しかし、これだけでは、芽がふき出す条件がととのっているだけ
です。芽をつかんでのぼしてやる指導者がほしいのです。

あの青年学級が「ゆきづまり」を打開した例があります（兵庫県
美方郡美方町Ⅱ前記と同じ報告書から）。この青年学級は、講義学

習とレクリエーションをからみ合わせた時間割ではじめました。と
ころが、レクリエーションには来るが、講義には出ないという生徒
が多くなったのです。そのゆきづまりを打開しようと、学習グルー
プをつくった。出席は平均八十五％になったのです。それは「自分
の欲求がはっきり意識されたこと、自分で運営しようとする意
欲が強められたこと」と報告書はのべています。しかし、それも次
のゆきづまり」がやってきたのです。

グループによる共同プロジェクトを中心とする学習活動がとり上
げられたのは、このときです。「生産・生活学習」といっておりま
す。プロジェクトの希望はいろいろ出たが、地域の農業の課題にし
ほって「レタス栽培の研究」と「育苗の研究」の二グループ。それ
に女子の「食生活の研究」のグループが生まれています。結果はは
っきり分らないが共同農園の成績はよく、村の人から「やはり勉強
するものは、こんなにちがうものか」といわれるようになった、と
いうから大きな成果でしょう。いま、定時制高校生まで参加して共
同プロジェクトが続いているということです。

これも専門家にいわせれば、なんでもないことかも知れません。
しかし、学習が与えられたものから、自主的なものになるにつれて
生産技術の研究に立ち入ってきたその経過を、ここでは問題にした
いわけです。つまり、講義学習——グループ学習——共同プロジェ
クト、という歩みは、けっして偶然のことではないということです
まえの例で、青年の生産学習の芽はその土台に「仕事」（生産労
働）があったということを強調しました。それが個人的なものでな
く、共同の農園を土台にしたところに、いっそう「学習」として
成立しやすい条件にあったわけです。それが後の例で、さらにグル

1. プロジェクトのかたちで、生産学習の実体があらわになつてきたといえます。

さいしょから生産を目的にした集団が、「なぜ、できないのだ」「安いのだ」というところで、「学習集団」化の芽をふき出してたじろいでいる例と、すべり出しは教養を身につけようとした集団がゆきづまりを打開しつつたどる段階で、生産技術の研究に入っていく例とが、じつにいろいろ課題を投げかけてくれます。

ただ、ここでやはり大きな課題は、この二つの例は、じつは日本の各地の実例では、一つの「環」になつて、どうどうめぐりをしていくということ。つまり共同プロジェクトも現状では、また「生産」それじたいの能率だけを問題にする「仕事」の集団の性格にもどつてしまうということではないでしょうか。

その悪質環の経路をたち切るために、プロジェクトにかなり明確な「実験」の性格をもたせなければならぬことだ、と思われま

地域の中学校

指

導者といい、実験的プロジェクトといい地域の事情ではかなり大へんな問題です。しかし、これは現状、じつは学校に期待するところが大きいのです。ある県の青年学級主事講習では、生産学習の指導はとてできないので、青年のもつてくる質問を紙に書いておいてもらつて、明日、理科の先生や職業の先生に回答してもらつているが、それでも青年は大へんよろこんでいる」という話がありました。

ところが、ちようどそこに傍聴に来ていた理科の先生はじつは、青年学級の生徒の質問をうけるようになってから、今まで中学で教

えている理科が、いかに地域の生活に役立たないものであるか、が身にしてみ分つた。社会教育にクビをつつこんで、私には得がたい収かぐがあつた」とのべておりました。

青年たちの生産学習が、「実験」をともなわない方向に流れていってしまう原因は、いろいろあるでしょうが、一つの原因は、中学校教育にあると思われま

す。地域の生産に結びついていない理科・数学・職家の実態や、とくにそのなかで、実験のよるこびを味わせていないこと、科学技術の総合的な学習の場がなかつたことなどでしょう。

さきほどの理科の先生の反省というのは、おそらくこういう実情から、とりわけて、学校教育における教科主義が、この青年たちに生産・生活の場で必要な「総合的」な技術教育を具えていなかったというさとり方であつたろうと思ひます。あるいは、この先生は、社会教育の場にこそ、学校教育のなし得なかつた生産・科学・技術の「総合」学習の可能性を発見したのかも知れません。

い

ずれにしても、ここでいえることは、地域の生産学習は、その地域の学校教育における産業技術教育のおこなわれ方と、深いつながりをもっているということ——中学の産業技術教育の質と量のうえに、青年たちの生産学習のあり方が考えられるし、現実青年たちの生産学習のおこなわれ方から、地域の中学校における産業技術教育がふたたび反省されていいのではないか、ということ

です。

一歩すすめて夢想論ですが、中学校じたいが、地域の生産学習のセンターになることが、かえつて義務教育にゆがんだ産業教育をふ

表題をみると、いやにむづかしいような感じをうけるが、原題の (Teachers and the International Working-Class Movement) というのを直訳すると、こうなるのである。

しかし、内容はそんなにむづかしいことでもなければ、特別のことが述べられているのではない。むしろ民主主義を遂行していく教師の当然の任務が、きわめてあたりまえのこととしてのべられているのであるけれども、その現実が口でいうほど簡単ではなく、この冊子でその発展のあとが歴史的にたどられているように、多くのきびしいたたか

いの中におかれている。この当然あるべき教師の姿が、ともすると、一国の支配者や反動勢力によっていがめられ勝ちなところの問題がある。それを防ぐために教師が国際的に手を握り、労働運動と固く結ぶ必要のあることを、ドラヌーは強調しているのである。

著者ポール・ドラヌーは、ご承知のように、世界教員組合連盟 (F.I.S.E.) の書記長であり、昨年来朝したこともある人で

ある。「一九四六年、戦雲がようやくおさまってみると、強制収容所の殺人小屋、有名無名の大虐殺といった、戦争のおそろしい惨禍が見出されるといしまつてあった」(ワロンの序) 時代に、世界労働組合連盟の産別として、世界各国の教員組合が国際的な結びつきをしてから以来の動きを教育の世界的な発展の見通しのもとに、実に適確に記述している。現在わが国に起

教師と国際労働者階級運動

ポール・ドラヌー著
世界の教師刊行会訳

ている教師への「勤務評定」の問題にしても、ここに記述されていることと別個の問題ではない。

日本の教師の一人々々が、ドラヌーのいう「恒久平和、ファシズムの抹殺、自由の伸張、そして大衆の幸福の増進をもとめる諸国民の熱望が力強く表明された」今日において、時代を遂行させようとする動きは、アメリカ資本主義の強圧によって、依然と

して続けられている事実を、国際的に理解することが最も必要であろう。それによって身近に起りつつあることの本質を知り、それに対処する底力が養われなくてはならない。

表題が示す印象(コトバ)が何か遠いことのようにうけとられても、今後の教師、今後の教育にとって、現実にはせまっている問題の本質であるこの冊子は、広く世界各

国の教師の胸に刻みこまれてよいものであろう。この起点を忘れて、現在の教育の道はないと思うからである。本連盟の会員各位にも広く読まれることを切望してやまない。

(価八〇円、送料八円、東京都千代田区神保町二の一 教師の友の会発行)

(池田生)



語りあう未来の教師たち

▽ 全日本教育系学生協議会第四回セミナーは、群馬大学で約一六〇〇人の全国学生を集めてひらかれました。

デモ先生、シカ先生の未来をもっと一般にみられている学生たちの研究集会もしいに成長して本年で四年目。個人的な学問研究や就職準備のための勉強でなく、国民のための教育という、すでに賭けられた、なみなみならぬくるしい未来を、眉をあげ、手を取りあつてきりひらいてゆこうとする若々しい意欲に、私たちは大いに期待しなくてはならないと思います。

▽ 分科会は三二の分科会に分けられ、それぞれ五、六〇人の学生たちが、自主的に自由な討議をつづけました。連盟からも、地元の大群の吉田元、東京から清原、伊藤委員、それに編集部の山口が参加し、機関誌を職業科と家庭科の出席者全員に無料配布するほどの気の入れたものでした。(山)

あとがき

▽ 世はまさに科学技術教育時代、連盟年来の主張がみとめられるときがきた。そんな声が今年あたり、ちらほらきかれるような気がします。だが、ちよつと待ってください、「パスにのりおくれるな」とばかり、あわててのつかつていって、あとで、ふたたび後悔のホゾをかむようなことはしたくないものです。

このごろのように、連盟がみとめられたようにみえるときこそ、お互いにおちついて眉につばをつける必要があるはしないでしょうか。かえつて試験の年というべきでしょう。新年にあたり輝かしい連盟の前途をのぞんで、あえてにくまれ口をたたくゆえんです。

▽ ごらんのように新年号から「科、技教育振興の問題点」として連盟の総力をあげて特集してゆきます。第一回は、「複線型」につながるコース分けの問題についてとりあげましたが、ひきつづき、二月号では「科、技教育と道徳教育」、三月号には躍進する科学技術と教育内容をとりあげてゆきます。御声援をおねがいいたします。

▽ 「日教組教研集会をかえりみて」については、これまでの六次にわたる教研集会の報告書を分析整理したものが、一冊にまとめられて、一月中旬に明治図書から刊行され

ます。本号の二編の主要も、その一部として含まれることになっていきます。

▽ 教研集会の回顧と展望をのせましたが、下旬には待望の別府大会が開かれます。一年間の研究成果をもちよつて、何とかして、一人でも多く、別府へ出かけたいたいものです。そして、むこうで連盟会員の集まりがもてたらどんなに愉快でしょう！

それに併せて、一月号で休載した村田忠三さんの「家庭科のほんすじをさぐる」を二月号から何回か連載する予定ですが、長い間、多忙のなかをセッセと集つて開いている「家庭科研究会」の愛すべきオパチャマたちの努力の成果に立ち、その風ほうをまさまさと想起させる名文です。御期待下さい。

教育と産業・一月号

(通巻第六十九号)

昭和33年1月5日発行

定価三〇円(送料四円)

編集兼 村田 忠三
発行人

東京都目黒区上目黒七の二九
発行所 産業教育研究連盟

(振替東京五五〇〇八番)
本部 国学院大学教育学研究室内

▽ 書店販売せず直接注文のこと。
▽ 会費前納の会員に毎月送附する。
(会費年四〇〇円・半年二〇〇円)

▽ 入会者は会費を添えて申込むこと。

昭和33年度総会おわる

暮もおしせまった一二月二七、二八日の両日、国学院大学で連盟の総会をひらきました。大阪の山田さん、京都の世木さん、新潟の林さんをはじめ、全国から集った会員が研究部の提案をもとに熱心に討論し、また連盟になじみのふかい中教審の日向照さん、東大の宮原誠一さんの話をうかがい、終つて次年度の新しい委員として、つぎの各氏を委任しました。詳細は二月号でお知らせします。

- 有田 稔 池田 種生 伊藤 忠彦
- 稲田 茂 清原 道寿 若山 貞胤
- 小山 和夫 清水 蕉 杉田 正雄
- 高橋 太郎 東野 貢 中村 邦男
- 西尾 幸子 長谷川 淳 水越 庸夫
- 村田 忠三 村田 泰彦 × 矢野 敏雄
- 矢島 せい子 山口 富造 吉田 元
- 和田 典子 ○ 後藤 豊治
- 中谷(数教協) 芳賀(科教協)
- 印は委員長
- ×印は事務局長

会 員 名 簿(五)

(新潟県のつづき)

中頸城郡頸城村大湊中学校	渡辺 喜栄	小松市島田町	板津中学校	米田 稔
新潟市白新中学校	保倉 和代	羽咋郡志雄町	志雄中学校	倉辺喜久雄
東頸城郡安塚町菱里中学校	丸田 優	小松市島田町	板津中学校	西田 盛二
三島郡関原町	関原中学校	七尾市石崎町	香島中学校	川崎 昭治
村上市山辺里中学校	斎藤 毅	小松市島田町	板津中学校	松原 三郎
三島郡出雲崎町大字沢田	日浦 宣治	同 右	鳳至郡浦上中学校長	北野 喜一
富 山 県		富井 県		鍛冶多三郎
婦貞郡婦中町速星中学校	高森 光二	鯖江市四方谷町		中橋 利平
富山市五福五七〇五	牧田 忠一	坂井郡川西村川西中学校		小林 繁記
婦貞郡和合町草島二五〇	金山金三郎	南条郡 河野中学校		刀称勇太郎
郎富山市住友町三五三	石上 利隆	福井市牧之島福井大学教育学部		吉田 武
東礪波郡福野中学校	鴨野 孝治	同 右		山本 総一
礪波市柳瀬庄西中学校	野守 勇蔵	坂井郡丸岡町城北中学校		荻原 繁康
富山市五福一三〇	西部中学校	福井市松本下町三四の一		上田亥之八
東礪波郡庄川市広川中学校	泉野 重政	坂井郡丸岡町竜北中学校		北川 正道
石 川 県		静 岡 県		石原 静
江沼郡橋立中学校	時岡 定治	浜名郡新井町新井中学校		菅 誠一
石川郡松任町	松任中学校	清水市下清水神田一〇〇		山本 秀雄
金沢市宮守堀通 県教育委員会	吉野 進	引佐郡三カ力町摩訶耶一八一		長谷川 懿一
能美郡辰口町 山上中学校	大家 久嗣	浜松市高町五三		南部中学校
珠洲市飯田町 春日中学校	前野 修一	浜松市竜禅寺町		沢根 文一
		富士宮市立第一中学校		塩川 辰義
		浜松市芳川郡盛南陽中学校		鈴木富美雄

中学校の産業教育

高田集会の成果と課題

産業教育研究連盟編集

科学技術教育の振興は今日の急務である！

本書は高田市における全国集会の成果と課題を具体的に明らかにしたもので、これからの産業教育のすすむべき方向をしめす最良の指導書である

新刊

科学技術教育の振興は今日の急務である！
本書は高田市における全国集会の成果と課題を具体的に明らかにしたもので、これからの産業教育のすすむべき方向をしめす最良の指導書である

科学技術教育のための指針！！
全国の中学校教師の努力と
研究の成果ここに結集！！

— 定価 二八〇（送料 二八） —

目次

- まえがき — 研究協議のねらい —
- 最近の技術革新と教育 東京工業大学学長 内田 俊一
- 分科会の成果
 - (1) 都市における学校の「職業」の教材選定と教育課程
 - (2) 都市・近郊農村の学校の「職業」の教材選定と教育課程
 - (3) 都市・近郊農村の学校の「家庭」の教材選定と教育課程
 - (4) 農山漁村の学校の「職業」の教材選定と教育課程
 - (5) 農山漁村の学校の「家庭」の教材選定と教育課程
- 職業・家庭科の今後の課題 東京工業大学 助 教 授 清原道寿

お申込みは……

(発行) 東京都文京区駒込片町32

(販売元) 医歯薬出版株式会社

医歯薬ビル内

電 (94) 7137-9・振替東京 13816

生活科学調査会